京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2017. 夏

こごみ日和72

特集：この容器、どうやって分別すればいいの？
～識別マークを見ながら、エコなお買い物を！～
京都大学大学院地球環境学堂 准教授 浅利美鈴さん

ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」：
パタゴニア 京都さん

Hand in Hand：お買い物とは、どんな社会に一票を投じるかということ
シサム工房

なごみ日和：舟屋日和
KBS京都 アナウンサー 海平 和

人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第1回：
早川刃物店

地域活動レポート：ECOからはじまる 笑顔のUZUを
～太秦地域ごみ減量推進会議～

あるスーパーで買った24品。いろいろな方法で包まれています。
身近な容器包装、かしこい分別方法とは？
一緒に考えてみませんか。浅利先生が助言してくださいますよ。

ごみにまつわるこの数字なぁに？
20年で5.5倍増
答えはWebへ！
※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」をご覧ください。

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ http://kyoto-gomigen.jp/

手をとりあって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議
ごみ減 検索

特集

この容器、どうやって分別すればいいの？

～識別マークを見ながら、エコなお買い物を！～

京都大学大学院地球環境学堂 准教授 浅利美鈴さん

「この黒い発泡トレーは、店頭回収ボックスに入れていいの？」、「紙袋に見えるのに『プラ』マークが付いているけど、どっちなの？」など、家庭から出る容器包装の分別について困った経験はありませんか？考えれば考えるほど分からなくなって、結局「燃やすごみ」に入れてしまったり…。京都市では、平成19年10月からプラスチック製容器包装（以下、プラ容器包装）の分別回収が、また平成26年６月からは雑がみの分別回収が始まり、生活の中から出る不要な物を「ごみ」ではなく、「資源」として捉え、適正に再利用しようという動きが強まっています。しかし、身近な「資源」の分別には細かな疑問が付きものです。今回は、知っているようで知らない容器包装の分別について、京都大学大学院地球環境学堂准教授の浅利美鈴さんにお話を伺いました。

ティーバッグのたい肥化についてお話される浅利先生。先生は、マイバッグ、マイ箸に加え、マイスプーンも持ち歩いていらっしゃるそうです。

増え続けるプラスチック製容器包装

現在、スーパーなどの小売店では多くの商品が容器包装に包まれています。高齢化や単身家庭の増加などで食生活が変化し、個包装された食品が重宝される今、特にプラ容器包装の流通量は増加の一途をたどっています。容器包装には、商品の品質や形状を保つという大切な役割がありますが、中には、中身に比べて大きな容器に入っていたり、幾重にも包装されていたりと、過剰なものも多く見られます。

例えば、３パック入りの味付け海苔は、外装・トレーなどのプラ容器包装に加え、それぞれのパックに乾燥剤が付いているので過剰包装だと感じます。３パック入りはお得だという消費者心理が働くためか、ついつい余分な量を購入するものの、食べ忘れなどが原因で手つかずのまま廃棄されることも多く、食品ロスの問題とも結び付いています。

また、総菜（そうざい）や生鮮食品の小分け販売が主流となり、さまざまな色や形の発泡スチロール製食品トレー※が見られるようになりました。今回の取材に協力して下さったスーパーマーケット「グレースたなか」でも食品トレーの店頭回収が行われており、一般的な白色トレーは、回収後、ペレット状にされ、再び食品トレーにリサイクルされます。キノコや刺身などによく使われている色柄付きトレーは植木鉢などの原料にリサイクルされています。納豆やカップラーメン等のプラ容器は、店頭回収では異物となります。汚れを落として、市が回収するプラ容器包装に出すことで、リサイクルされます。

お洒落な「紙」にも要注意！

一つずつ紙製パッケージに入っているゼリーやアイスクリームなどもよく見かけます。お洒落なデザインは他の商品との差別化ができ、訴求力もあるので販売促進には好都合でしょう。しかし、容器包装は中身を消費すれば不要になるのも事実。少ない「資源」に包まれている商品を選ぶことは、エコな買い物の第一歩でもあります。

デザイン重視のパッケージにひかれて購入したものの、食べた後に残るのは容器の山。紙製パッケージは燃やすごみではなく「雑がみ」の分別回収へ、容器やふたも識別マークの通りにきっちりと分別したいものです。

また、きれいな和紙風の包みで包装された和菓子なども私たちの目をひきます。この素材には「プラ」マークや「紙」マークが付いているので、ぜひ一度、いろんな商品を見比べてみてはいかがでしょうか。資源の識別マークは、異なる素材で作られている場合（「紙」と「プラ」の複合素材など）は、重量比が高い方のマークが表示されていますが、中には表示がないものもあります。その場合は、「手でちぎって破れたら『紙』、伸びたり破れなかったら『プラ』を目安にすると分かりやすいですよ」と浅利先生。紙と間違えやすい不織布は「プラ」であることが多いので、こちらも気を付けたいですね。

雑がみの分別が定着する一方で、「この紙は回収できるの？」という疑問も多く耳にします。写真やカーボン紙、防水加工紙など、特殊なコーティングがされているものは異物として分かりやすいですが、意外に見落としがちなのが「匂い」です。洗剤・線香の箱やチョコレートが付いた包み紙など、匂いのきついものは残念ながら「燃やすごみ」の対象となります。総菜などで、紙袋の一部に透明な小窓がついているものには「プラ」表示がされているものもありますが、紙とプラに分けて分別するマナーが定着すると良いですね。

資源分別の５つのヒント

浅利先生が普段からされている分別方法について、身近な例を教えて頂きました。

☆頂いた紅茶のティーバッグで学生とお茶を楽しむことがありますが、飲んだ後はティーバッグを乾かし、茶葉を袋から出して生ごみコンポストに入れています。紙のティーバッグの場合は、袋のまま、たい肥化しています。

☆手早く食事をする時に、レトルトのカレーを食べることもありますが、市販のカレーは味が濃いので、ルーをお皿に入れた後、レトルトパックにお湯を入れて味の調整とパックの洗浄を一度に済ませます。インスタント麺や調味料のボトル・チューブも、お湯でささっと洗うと汚れが取れやすいですよ。

☆リンゴやモモが一つずつ包まれている緩衝材は、次の買い物の時に持って行き、トマトなどの傷みやすいものを包むのに使っています。

緩衝材や外袋に包まれたリンゴと、紙とプラが混在する揚げ物の袋。

☆コロッケや唐揚げなどの揚げ物が入った紙袋は、油でべた付く部分は燃やすごみにしますが、汚れていない部分は、はさみで切って雑がみに。総菜パックのラップは、ラベル部分は燃やすごみですが、透明なラップの部分は軽く洗ってプラ製容器包装として分別しています。

☆絞っても出なくなった歯磨きチューブは水で洗ってその水で、洗面台やシンクを磨くと、とてもきれいになるのでお薦めです。

今回、取材のために持ち込んだ商品は全部で24点。浅利先生は一つひとつを手に取りながら、私たちの小さな疑問にも丁寧に答えて下さいました。買い物時には識別マークを参考に、本当に必要なものを必要な量だけ選ぶようにすると、家計も燃やすごみもすっきり、容器包装のリデュースの達人が増えることを願っています。

※…プラマークに加え、PS（ポリスチレン）マークが付いているものもあります。

○資源分別の詳細については、京都市（環境政策局）発行「正しい資源物とごみの分け方・出し方」ハンドブック、または「こごみネット（http://kyoto-kogomi.net/）」や昨年12月から配信が開始された「ごみ減量」や「分別」に役立つスマートフォンアプリ「こごみアプリ」が参考になります。

取材協力：株式会社 グレースたなか
住所▶京都市左京区田中飛鳥井町40

プラの納豆パックを綺麗にするには？

水を張ってしばらくおいておく。
それを２、３回繰り返せばそれだけで汚れがとれます。
水気をとってプラ製容器包装に分別を！
（桶水を活用しよう）

松村香代子（平成29年５月18日取材）

ビジネスを通して環境問題と向き合う アウトドア好き社員たちの自然保護への取組

パタゴニア 京都　ストアマネージャー　瀬戸 勝弘さん

買い物に行ったらお店の人にすすめられ、予定外のものまで買ってしまった――こんな経験、皆さんも少なからずあるでしょう。販売員が自社の商品をすすめるのは、至極当然のこと。しかし、そんな中で、「買わないで」とお客様に呼びかける企業があります。アウトドア用品やウェアの製造販売を手掛ける「パタゴニア」。環境に配慮した機能的な製品と、環境保護活動への取組で知られる世界的なメーカーです。今回は「パタゴニア 京都」のストアマネージャー瀬戸勝弘さんに、企業としての取組や使命について伺いました。

瀬戸 勝弘さん

“社員をサーフィンに行かせよう”を実践

米国発のアウトドアブランド「パタゴニア」は、1988年に日本支社を設立。現在、国内に22の直営店を展開している。日本に支社を置くにあたり、アウトドアスポーツを楽しむスタッフたちがいつでも活動できるよう海も山も近い鎌倉の地を選んだ、というエピソードからもわかるように、スタッフの多くは、アウトドアスポーツのスペシャリスト。周囲に迷惑がかからなければ、基本的に好きな時にアウトドア活動ができる体制が整っている。同社の創業者イヴォン・シュイナード氏が書いた経営論『社員をサーフィンに行かせよう』のタイトルがまさに実践されているわけだ。このタイトルの主旨は、“いい波が来たらいつでもサーフィンに行って良いよ。でも、他の時間でやるべきことはきっちりやって、自分の責任をしっかり果たしなさい”というもの。これはアウトドア活動限定ではなく、家事や育児などの理由による半休や中抜けも認められているという。スタッフの自主性や責任感を信頼し、一人一人のライフスタイルを重視する同社の企業文化が伝わってくる。

パタゴニアの理念とは

「スタッフは、レベルや種目を問わず、みんなアウトドアスポーツをやっています。自然環境に左右されるアウトドアスポーツを通して環境問題に関心を持ち、パタゴニアに入社してきたという人がほとんどです」と瀬戸さん。自身も長年サーフィンを続ける中で環境保護への意識が高まり、パタゴニアの理念や活動に共感して約20年前に入社。ライフワークとして環境保護活動に取り組んでいる。

創業者による「地球に対する企業の責任」が掲げられた店内

同社のミッション・ステートメント（経営理念）は、『最高の製品を作り、環境に与える不必要な悪影響を最小限に抑える。そして、ビジネスを手段として環境危機に警鐘を鳴らし、解決に向けて実行する』。この理念の下、高品質で機能的、かつ環境に配慮した製品の製造・販売を行っている。また、全社を挙げて地球環境活動に取り組んでおり、スタッフは最長２ヶ月間職場を離れ、環境保護団体の活動に参加できる「環境インターンシップ制度」が設けられている。

スタッフの採用にあたっては、『アウトドアスポーツの経験』や『環境問題への関心』を重視しているという。「例えば、アウトドア店の勤務経験があって即戦力になる人でも、アウトドアの楽しさを知らなかったり、環境のことに無関心なら、働いているうちに価値観がずれてきます。会社の理念を共有・実践できる“仲間”を探すわけですから、この2点はとても重要です」。

新店舗に移転した京都ストアの取組

京都にパタゴニアの直営店ができたのは2012年12月、烏丸御池の新風館への出店だったが、2016年3月の新風館の閉館に伴い、同店も休業。昨年10月末に四条通に店舗を移し、国内最大級の大型店として再オープンした。新風館の旧店舗は、高い環境基準をクリアした建物に与えられるLEED※ゴールド認証を取得し、建材や機器の調達から、室内環境、廃棄物処理に至るまで、徹底的にエネルギーと環境に配慮して造られた店だった。新店舗の内装も、できる限り環境への負荷を軽減した資材を使い、旧店舗で使っていたレジカウンターや、バンブーで作ったラックなど、什器（じゅうき）一式そのまま再利用している。

新店舗は３フロアからなり、１・２階が売り場、３階にはイベントスペースが設置されている。「独立したイベントスペースがあるのは京都ストアだけなんです。パタゴニア主催のイベントも行いますが、同じような考えで活動されている地域の皆さんに開放して、フリースペースとして使っていただいています」。旧店舗では、売り場と兼用だったため使用できる時間帯に制限があったが、新店舗では営業時間中でも利用可能。講演をはじめ、ヨガの講習会、オーガニックライフのセミナー、ソーラーパネルのワークショップ等々、さまざまな企画やイベントに活用され、フル回転している。

また、京都ストアは福井原発に近いこともあって、「私たちの愛する京都やその周辺の自然環境を守るために、まず私たちが行動を起こさなければ」と、スタッフが一丸となってデモに参加するなど、脱原発運動に積極的に取り組んでいる。

取材こぼれ話

■毎日の計量でごみを減量■

京都ストアでは、営業が終了すると、その日出たごみを集めて毎日計測している。これは「お客様に“マイバッグ持参”や“不必要なものを買わないで”と呼びかけるのだから、まず自分たちが実践を！」とスタッフが自主的に始めたもの。毎日のごみの重さを記録して、増減をチェックすることで、ごみの減量化につながっているという。

“要らないものは売らない”という企業姿勢

「私たちは買い物に来られたお客様に『本当に必要なんですか』と声をかけるんですよ」と瀬戸さん。「ただ“欲しい”だけのものや、同じようなものを重複して買うことは、結果として多くの廃棄物を生み、環境に負荷がかかります。だからお客様に『本当に必要なんですか』、『今あるものでいいんじゃないですか』と聞いて、要らないものは買わないよう促します」。

さらに、「今あるものを修理して着たい」という人のために、製品のリペア（修理）部門を設置。可能な限りお客様の要望に応え、鎌倉のリペアセンターで高いスキルで修理を施してくれる。修理の依頼数は年々右肩上がりで、１日平均１件、週末などは３～４件の依頼があるという。また、修理が難しいものについては回収し、再資源化している。

2009年、同社では国内の直営店で一斉に、持ち帰り袋のデポジット（預り金）制を導入した。これはレジ袋の消費抑制と、マイバック持参を促すことを目的としている。持ち帰り袋のデポジットとして１枚100円を支払い、返却時に返金されるシステム。この持ち帰り袋の材料は、流通の際に製品が梱包されていたLDPE（低密度ポリエチレン）のプラスチック袋を再資源化して作成したもの。返却された持ち帰り袋も再び再生される。

リペアカウンターには多くの修理依頼品が持ち込まれる

瀬戸さんは「外国人のお客様は７～８割が『袋は要らない』とおっしゃいます。でも、日本人のお客様はまだまだ袋を希望される方が多いですね。パタゴニアのお店に来られたことがお客様の消費活動を見つめ直す良いきっかけになればいいなと思っています」と。

パタゴニアという企業の使命

2011年11月25日のニューヨーク・タイムズ紙に同社はこんな広告を掲載した。『Don't Buy This Jacket（このジャケットを買わないで）』。これは「より良い環境を維持していくためには、消費者は購買決定をする前によく考える必要がある。そして、企業はビジネスとしての大量生産を削減し、より高品質なものを生み出していかなければならない」という投げかけだ。当時、大きな反響を呼んだこのインパクトのあるメッセージにこそ、パタゴニアの使命がある。

身近なレジ袋から環境問題を呼びかける

「アパレル業界は華やかに見えますが、裏には人に見せられないような環境や労働があります。農薬や化学物質で人が亡くなっていたり、幼児を過酷な環境で働かせたり……それが現実です。最近はものが安くなっていますが、なぜその値段で買えるのか、その背景を考えてみて欲しいですね」。

最後に、「『要らないものは買わないで』『着古したものでも修理をして着よう』というビジネススタンスは、営利企業として矛盾は感じないのですか」と質問した。すると、「私たちは『売らない』というサービスを提供しているんです。それがパタゴニアという会社のおもしろい部分であり、誇りです。ビジネスはやればやるほど環境に負荷がかかります。でも、私たちがリーダーとなり、こういう形でやってもビジネスとして成り立つんだという一つの道しるべになって、その姿を見せていきたいですね。」そう言って瀬戸さんは姿勢を正した。

創業者シュイナード氏の「ビジネスは自分たちが使う地球資源に根幹があって、社員や株主以上に、環境や地球を大事にしていかないと、ビジネスとして成立しない」という言葉は、きっと多くの企業のヒントになるに違いない。

※LEED（リード／Leadership In Energy and Environmental Design＝エネルギーと環境に配慮したデザインにおけるリーダーシップ）
米国グリーンビルディング協会（USGBC）が開発、運用している、建物と敷地利用についての環境性能評価システム

藤原幸子（平成29年５月10日取材）

Hand in Hand

お買い物とは、どんな社会に一票を投じるかということ
What you buy is what you vote.

京阪出町柳駅を降りてしばらく歩くと、京大農学部のすぐそばにオシャレでかわいいお店「シサム工房」があります。「シサム」とは、アイヌの言葉で「よき隣人」という意味。今回は、フェアトレードを通じて、貧困や差別などの社会問題を訴えると同時に、フェアトレードによる新しいライフスタイルを提案し続けているシサム工房代表の水野泰平さんにお話を伺いました。

1999年に京都で生まれた「シサム工房」

フェアトレード商品の購入は最も身近な国際貢献

フェアトレードとは、商品の作り手の生活や福祉の向上を第一の目的とした貿易のこと。従来の貿易のように、利潤の最大化を第一の目的にするのではありません。一時的なチャリティではなく、労働の対価として適正な価格を支払い、経済的に厳しい状況にいる人々の生活改善と自立を支援する貿易の仕組みです。このような取組から、2016年、シサム工房は京都市と公益財団法人京都高度技術研究所の第１回「これからの1000年を紡ぐ企業認定」を受けておられます。

ネパールのフェアトレードNGO「サナハスタカラ」のスタッフと生産者たち

生活の中にフェアトレード商品はありますか？

シサム工房　代表　水野泰平さん

シサム工房誕生のルーツを尋ねると、きっかけは南アフリカでのアパルトヘイト（人種隔離）問題を知り、その不条理さから、反アパルトヘイトの市民活動に参加したことでした。その後、アジア・アフリカへの一人旅、そこでたくましく暮らす人たちと出会い、何かこの人たちとつながりを持って生きていきたいと考えた末、出した答えが「シサム工房」だったそうです。今年、３月末に東京吉祥寺に8店舗目のお店をオープンしましたが、「ここまで事業が大きくなることは想定していましたか？」と尋ねると、「いえいえ…」とほほえみながら、「事業の拡大が目的ではなく、ひとりでも多くの方にフェアトレードに思いを寄せる場を提供したい」。さらに、「フェアトレードのことは知っている人は増えても、実生活の中に商品を取り入れている人は少なく、事業の難しさはそこにあるのです。まずは、商品を手に取って見て欲しい。」と力を込めておっしゃいました。

エコバックもフェアトレードで

最近では、企業・団体のCSR活動やイベントの参加景品としてエコバックが配られることが多くなりました。シサム工房では、このエコバックにも作り手の思いがこもったフェアトレード商品にすることを提案しています。服などの衣類を作るには作り手の技術的なトレーニングが必要になりますが、エコバックの製作はこのような作り手の技術的支援にも貢献できます。フェアトレードエコバックは途上国に暮らす作り手の経済面だけでなく、技術面でも支援が可能になります。

SISAM COLLECTION

毎年５月は「世界フェアトレード月間」。今回で５回目となるSISAM COLLECTION（通称「シサコレ」）が、今年も盛大に開催されました。スタッフによるファッションショーや、手刺繍（てししゅう）を体験できるワークショップ、商品開発スタッフによるお話会など、フェアトレードの舞台裏をたっぷり楽しめるSISAM COLLECTION。今回は、落語家の月亭太遊さんによる「ショーヒイッペン塔」と題するフェアトレード落語も披露されました。近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」という「三方よし」の理念に「作り手よし、地球環境よし」を加えた「五方よし」事業を目指すシサム工房。挑戦はまだまだ続きます。

高野拓樹（平成29年５月22日取材）

なごみ日和

KBS 京都 アナウンサー
海平（うみひら）　和（なごみ）

●● 第14回　「舟屋日和」 ●●

暑くなってきて、なんだか疲れ気味かも…そんな風に感じておられる方も多いのではないでしょうか？ですが、日本には四季があって、だからこそ、その時々で楽しめる自然の景色、旬があるというのはありがたいことです。

先日、京都府北部の伊根町に行ってきました。伊根町といえば、海に浮かぶ舟屋の景色が有名で観光客も多く訪れます。ですが、意外なことに気軽に立ち寄って食事や海の景色を楽しめる場所は少ないそうです。そんな中、この春新たな観光拠点として期待される観光交流施設「舟屋日和」がオープン。イネカフェ、鮨割烹（すしかっぽう）海宮（ワダツミ）といった飲食店舗もあり人気を集めています。

私は店内に入ると同時に「素敵～！」と感動の声をあげてしまいました。目の前にはすぐ海があり、絶好のロケーションです。そこで楽しめるのは地元の食材を使ったランチやスイーツ。その日に揚がった新鮮な海の幸を使った御膳なので、まさに獲れたて。内容はその日どころか、同じグループで訪れたお客様同士で変わってくることも。その日の漁や水揚げ状況が違うからこその、一期一会の楽しみ。「凝った調理をしなくても旬の食材のおいしさは最高の贅沢（ぜいたく）」と話す料理長はとても優しい表情をされていました。

絶景と旬のおいしさと、そこに暮らす方々との交流も魅力のひとつ。去年の春に大阪から伊根に嫁がれたマネージャーの前野さん。伊根に初めて来られた時、海の景色やここならではの自然との結びつきに感動。今は、日々、伊根の魅力を発信されています。イネカフェの永濱店長は、大阪の有名菓子店で長年働いておられましたが、オープンをきっかけに地元に戻ってこられました。地元のためにいつかは帰ってきたいという思いが叶い、以前はなかった地域の方とのつながりを楽しみながら、おいしいケーキを焼いておられます。

「舟屋日和」はたくさんの人の思いをつなぎ、今という時間の大切さを優しく教えてくれる、そんな気がします。

海平　和：京都市出身、2010 年 KBS 京都入社。テレビ「京スポ」「news フェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

人と物と。織りなす「もっぺん」物語　第1回

早川刃物店

５月のある日、「早川信久」のブランドを掲げ、四代目が受け継ぐ、早川刃物店の暖簾（のれん）をくぐった。この店には、「研ぎ」を中心に修理の依頼が、続々持ち込まれる。近畿ばかりか、北海道や鹿児島から、包丁、ハサミなど多彩な種類の修理依頼が届く。

物を切る、割る、削る…。私たちは遠い昔より、刃物に支えられて暮らしている。刃物の原料は、炭素鋼、合金鋼類（ステンレス鋼など）。空気中の酸素や水分の働きで「サビる」のは宿命でもある。さらに、刃が欠ける、折れるなどのトラブルも。包丁の場合、口金が外れ、木材である柄の部分が腐ったり、割れたりもする。

「研ぎ」は、素人がすると、刃物の命でもある切れ味が課題になる。愛着を持つなら、プロに任せるのが賢明。四代目となる中下さんご夫婦は、依頼に応えようと、最善を尽くす。まずポイントを見定め、「研ぎ」の方法を決める。一丁一丁研ぎ、磨き、刃返りを確認しながら天然の砥石（といし）で丁寧に仕上げる。時には、包丁の折れた柄を取替え、再び使えるまでに技を尽くすことも。

ある高齢の女性が持ち込んだサビの付いた包丁をピカピカにして渡すと「まぁ、こんなにきれいに。新婚旅行で買った包丁なの」と笑顔を浮かべられたそう。「喜んでもらえるとき、やりがいが」と、中下さん。物と物の間に、人と人との間に生まれる小さな物語がここにあった。

▶早川刃物店　京都市下京区堺町通仏光寺上ル　☎075-351-6731

修理するより新品を買った方が手っ取り早い…。たしかに修理・修繕には、お金も時間もかかる。人の物への関わりが希薄になっている現代、このシリーズ企画では、京都市ごみ減量推進会議の取組である「もっぺん」という事業の意義を問い直すため、修理や修繕を担うプロを訪ねます。

森田知都子（平成29年５月16日取材）

ECOからはじまる　笑顔のUZUを

京都盆地の西部に拓かれ京都市の行政区では最大の面積を持つ右京区、その中心部に位置するのが太秦学区です。ここでは、平成22年に太秦地域ごみ減量推進会議（以下、太秦地域ごみ減）が立ち上がる前から、フリーマーケットや使用済てんぷら油の回収、ふれあい喫茶などの地域独自の活動が盛んに行われています。ECOをきっかけとした地域の笑顔づくりの仕掛け人、太秦地域ごみ減会長の市田悦万さん、副会長の井上三郎さんにお話を伺いました。

今回お二人にお話を伺ったのは、太秦小学校前に位置する複合施設「笑顔ランド太秦」です。太秦地域ごみ減や太秦自治連合会などの地域の活動拠点であるこの場所は、太秦児童館や老人いこいの家もあり、毎日さまざまな年代が集います。ここでは、日曜日と祝日以外は毎日、使用済てんぷら油、蛍光管、リユースびん、乾電池、紙パックの資源物回収の拠点となっています。さらに年に３回、太秦地域ごみ減と右京エコまちステーションや西部まち美化事務所が連携し、その他の資源物回収も行われており、地域のごみ減量に日々機能している場所でもあります。

この「笑顔ランド太秦」の構内で目に入ったのは、落ち葉たい肥化ボックス。緑に囲まれた笑顔ランド太秦では、構内の落ち葉掃除が欠かせません。その落ち葉は捨てることなくたい肥化ボックスに入れられ、たい肥に生まれ変わるのです。昨年度、右京エコまちステーション協力のもと、完成したたい肥を配布したところ、地域の方から大変喜んでいただけたと同時に、落ち葉がたい肥に生まれ変わることを伝えるきっかけにもなったようです。

ごみ減量が地域をつなぐ

市田さんたちの活動は太秦地域ごみ減だけにとどまりません。年６回開催されている「ふれあい喫茶」は、地域の方が集まるきっかけのひとつとなっています。100円でコーヒー、たまご、パンが食べられるこの「ワンコイン喫茶」は、地域の方々に大好評。９時～12時と３時間の開催時間にもかかわらず、多い時では200人もの方が訪れます。地域のみなさんのふれあい、高齢者の居場所づくりを目的としたこの企画ですが、ここでも雑がみ分別についての掲示を行うなど、人が集まることを活かしたごみ減量の啓発にぬかりがありません。「ごみ減量のきっかけとなると同時に、集まった方同士が、話をするきっかけとなったら」と井上さんはおっしゃいます。今年度からは「にこにこサロン」と名前を変え幅広い年代の地域の方々の交流の場として、さらに広がっていくことが期待されています。

イベントは幅広い年代に伝えるツール

このような活動を続けてこられた市田さんたちは、太秦地域ごみ減として「ECOフェスタ2016 in UZUまさ」を、昨年度から新たに始められました。「何かをやらないことには始まらない。回覧板では伝わらない部分を、イベントに来てもらうことで伝えたい」。始めたきっかけはこの市田さんの熱い思いです。幅広い年代の方に来てもらえるイベントをと、太秦地域ごみ減と太秦児童館学童クラブ「親の会」とが手を組み考えました。その結果、集客が見込める児童館のバザーをはじめ、パッカー車へのごみ積み込み体験や、資源物回収、エコ工作など子どもから大人まで楽しめるイベントとなり、当日は大盛況。開催の案内は、自治会の回覧板での伝達だけでなく、児童館からの呼びかけなどにより、多くのみなさんに来てもらうことができました。「来てもらった方に少しでも多くの学びを」という想いから企画されたエコ工作では、地域で不要となった反物を巻く筒を工作に活用するなど趣向が凝らされたものとなりました。「まずは動くことが大切」と言われる市田さん、お試しに始めた「ECOフェスタ」でしたが、今年は第２回目を行うことも決まっており、「イベントを継続することでさらにごみ減量の大切さを伝えていきたい」と今後の意気込みを語ってくださいました。

前田　綾（平成29年5月10日取材）

ごみ日和 72 京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2017. 夏
編集・発行／京都市ごみ減量推進会議　普及啓発実行委員会　〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13 京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971　E-mail: gomigen@kyoto-gomigen.jp　URL: http://kyoto-gomigen.jp/

植物油インキで印刷しています。
この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！